

ママたちの居場所づくりへ



とまどいながらも、必死にケアを覚えた

思いで必死にケアを覚えて、パパやおばあちゃんにもできるようになってもらいました。

孤独な子育てを救ってくれた子育てサロンとママ友たち

生活相談支援センター
しゃろーむ 保育士
新井亜希子さん

自身の医療的ケア児の子育て経験をきっかけに、保育から福祉の業界へ挑戦。医療的ケア児の子育てサロン「にこちゃんルーム」の開催や、医療的ケア児家庭の個別訪問・療育等を担う。2児の母。



「けんたは本当に天使用いたかわいい子でした。お兄ちゃんがけんたが寝る周りにおもちゃを並べてくれたり、三男も記憶にあるみたいです。今もリビングに写真を飾っています」

2014年に出産した次男のけんたは、生まれた後に世界的にも例の少ない染色体異常が判明しました。初めはミルクも飲めず、笑ったりもできていたのが、2歳のときに敗血症性ショックで数分間心肺停止になり、脳に重い障がいが残りました。気管切開をして、人工呼吸器を装着。経鼻経管栄養となつて、医療的ケアのある生活が始まりました。主治医の先生に、**子どものこと以上に家庭のことを心配されたのを覚えています。**

長男の子育ての時に、教科書通りにいかず育児ノイローゼになった時期があったんです。そんなとき、地域の子育てサロンに行ってみたら、支援者の人が「よく来たね」と迎えてくれて、もう涙が出て、「私は一人じゃない。ここに居場所があったんだ」と思っただけです。けんたの時は、先輩ママたちに病院や福祉サービスのことを教えてもらいました。私自身もSNSで情報発信して、そこでつながった県外の医療的ケア児のママ友に、おすすめの事業所を教えてくださいまして。本当

にママ友ネットワークに救われました。

ケアに追われて保育の仕事には戻れないと思っただんですが、SNSで女性の起業についての投稿を見て、私もやってみよう。自宅のできる仕事として、よもぎ蒸しのサロンを始めたなら、ケアの合間に気分転換できて、**外の世界とのつながりって本当に大事だ**と思っただけです。

地域に医療的ケア児のママたちの居場所を

けんたが亡くなった後、「しゃろーむ」の職員の方から、「医療的ケア児のママがつながれる場がほしいと言われているんだけど、一緒にやらない？」と声をかけら



れました。それが、医療的ケア児の子育てサロン「にこちゃんルーム」のきっかけです。

「にこちゃんルーム」では、主に未就学のお子さんとママ・パパが集まります。歌を歌ったり、絵本を読んだり、講師を招いて手遊びやヨガ、コンサートを開催したり。**お母さんたちは日々、その子の命をつなぐだけで精一杯。**本を読んであげるとか、抱っこする余裕がないんです。でも、**抱っこは大切な触れ合い**になるし、子どもも安心するので、ママたちにはお互いの子どもたち

を抱っこし合うように話しています。「にこちゃん」を開催するようになってから、**ママ同士のつながりが生まれて、運転が苦手なママも『にこちゃん』に来たいからがんばって来ました**」と言ってくれています。そういう姿を見ると本当に励みになりますね。

地域の皆さんに伝えたいのは、医療的ケア児だからといってフィルターをささなくて大丈夫障がいに関係なく同じ子育てしているママ「近くにいても」**と想像してみてください**



にこちゃんルームに参加したママたちの声

“同じ月齢の子を見るのが辛くてどこにも出かけられずにいました。にこちゃんルームに参加して、他所のお子さんがわが子を可愛って抱っこしてくれて、子どもってすごいなって思いました。ここでママたちとつながれたので、いろんな情報を交換したいと思います。”

“私たちの時代は、支援が少なくて親子の関係が濃密になりすぎていると思います。でも、今はこうやってママ同士でつながれる場がある！ここに来れたら怖いものなしですよ。”



にこちゃんルーム

毎月第3水曜日
10:00～12:00

場 地域交流スペース
(中丸 9-257
びおもす蒲桜1階)

申 不要

生活相談支援センターしゃろーむ
(☎ 598-7099)

10月は21日開催

医療的ケア児者と

地域をつなぐ人たち

ここからは、医療的ケア児者やその家族が地域で自分らしく暮らしていけるよう支援する3人のインタビューをお届けします。支援者だからこそ語れる当事者の想い、そして、同じ地域に暮らす人たちへ向けたメッセージを聞きました。